

## 第5章 階層化——貧富の差に悩まされる社会



ゲルニカ。パブロ・ピカソ(1881-1973)が、スペイン内戦で1937年空爆を受けたスペイン北部・ゲルニカで悲惨な被害を被る人々を象徴して描いた。世界中で大衆は今やこれに似た状況に晒されているのではないだろうか。

## <現代の貧富の問題、金銭欲、権力欲、名誉欲にまつわる問題>

**山登** 貧富、権力、金銭に絡んだニュースは新聞に氾濫しています。貧富の差の場合、典型例がこの間(2012年暮れ)から問題になっているウォール街の占拠ですか。アメリカの貧しい若者たちが、ウォール街の人たちは富を独占している、世の中のシステムが間違っているのじゃないか、もう少し平等にしろという形で訴えています。Facebookの開発者であるマーク・ザッカーバーグも株を上場して、1兆5千億円も得たそうです。ビル・ゲイツは6兆円もの資産を持つことになりました。

アメリカではそういう例が多く、鉄鋼王のアンドリュー・カーネギー、石油王のジョン・ロックフェラー(図1)も、大富豪になって、カーネギーホールやらロックフェラー大学



図1. ロックフェラー邸の写真

を設立したり、ロックフェラー財団を創設したりしています。そういう形で、確かにアメリカン・ドリームで産業とか技術とかを興して儲けていく。その下で働いている人たちの中には、昔は非常に厳しい労働条件で働かされた人たちがいて、彼らが搾取していたというふうに考えられなくもなかった。ビル・ゲイツとかマーク・ザッカーバーグなどはむしろ技術開発をし、最近の金融資本主義のおかげで儲けたと言えるのかもしれない。少し

前のアメリカン・ドリームでは、権力欲、金銭欲などをポジティブにとらえていて、人よりも金、権威、名誉を得たいといった欲望または世間の評価に従って行動し、その報酬としてカーネギーにしる、ロックフェラーにしる、大富豪になって、世間からも評価されるようになりました。

さらにナチス・ドイツのヒトラーは当時の敗戦国ドイツの国民を熱狂の渦に巻き込み、権力を獲得して悲惨な戦争に駆り立てました。最近のアメリカ大統領選挙でも、大統領になると世間が評価するせいでしょうか、あの選挙戦の熱気は、大統領になりたいという権力欲のなせる技だと感心しました。当然大統領になれば責任があり、非常な努力と能力が必要でしょうけど、やはり世間が評価するからなりたいという欲が生まれます。最近はこうした権力欲、金銭欲などの欲望が目立ち、問題にもなっています。

その顕れである貧富の差が、ウォール・ストリート占拠という形で問題となりましたが、ヨーロッパのギリシャ問題などでも、若者の厳しい失業率という形で顕著になっています。こんな貧富の差って、どのようにして生まれてきたのでしょうか。それが何らかの形で解消・解決できるような方策が見つかってくれば、非常にありがたいと思います。いかがでしょうか。

例えば、ホモ・サピエンスが生まれるよりもさらに前、ヒト系統(猿人)が生まれてサバンナで狩猟採集に入ったころ、どんな生活だったのですか。そのころには貧富の差、階層、権力、などがあったのでしょうか。

**増保** 先ほどのウォール街の話に関係しているのですが、アメリカの富の大体50%が

数%の人に握られているという統計があるようです。日本ではそれほどではないかもしれませんが、小泉首相の行政の下で、富の偏りはどんどん大きくなっていきました。

格差があっても、国として競争に勝てばいいというようなものの考え方だと思いますが、競争を激しくすれば、やはり労働者は競争に駆り立てられて激しい労働を強いられるとともに、その割には収入が少ないということにもなりかねない。それが極限状態にまで追い詰められると、社会の根幹を転覆させるようなとんでもないことが起きかねません。

**山登** そうですね。それはアメリカ国内、日本国内だけじゃなくて世界を見渡したときに、国と国の間の問題でもそうですよね。アラブの春じゃないけれども、それこそアフリカ、中東などですね。

**増保** 北朝鮮でも、国民が大変な生活を強いられているのに、一発勝負でアメリカを狙ってミサイルを飛ばすなんていうことをやられたら、とんでもないことになってしまうかもしれない。最近、北朝鮮政府がそんな発言をしているようですが。

### <階層化の起源>

**山登** 貧富の差、権力、名誉などという言葉で代表されるような、人々の階層化はいつから始まって、なぜこんなふうになったのですか。

**増保** それは本当に根深いし、この後の資本主義経済、あるいは貨幣経済のところで話していく問題になると思いますけれども、ホモ・サピエンスが定住してそこで一つの集団ができる。その集団が50人規模だったらまだお互いに争うとか、あるいはうそをつくようなことはできなかったと思いますが、集団の規模が拡大して100人、1,000人と大きくなってくると、その中で権力者という存在がどうしても必要になってくる。

**山登** では、まず50人や150人規模の場合では、お互いが認識できるから平等だったのですか、お互いの目があるから。

**増保** それは重要な因子だったと言えるでしょう。ある獲物の成果を1人でせしめるなんてことをやれば、それはどこかでばれる。そうするときと罰せられるでしょう。そういう関係が保たれるのは、やはり50人、多くても150人の規模なのではないですか。

50人規模の集団では、いつも特定の人間が権力者として恩恵を受けていたわけではないでしょう。皆で幾匹かのシカをとってくるときもあれば、別のある日は大きなマンモスを皆の協力で倒さなければならないときもあるでしょう。それぞれの場面で、別のすぐれた人物が現れることになるでしょう。その成果に応じてその時々に分け前が少し変わったかもしれない。権力者ばかりが特権でいつも分け前が多いというわけにはいかない。

繰り返しになりますが、集団が何百人と大きくなってきたときには、ヒトの認識能力の50~150人という上限を超えてしまい、誰かやはりサル山のボス、つまりアルファ・オス（序列が一番上のオス）みたいな人間が出てきて統率しないとグループとしての結束ができなかった。だからそこに権力者が生まれ、権力を正当化するための宗教ができてきたと考えられます。

ヒトの集団が何百人とか1,000人の規模になったらどうなるか。今我々が生きている世界ではそこに視点を置かないといけません。その規模の集団になると、分業が起ってきて、ある人たちは非常に狩猟に長けている、別のある人たちは狩猟の戦略を立てる

のがうまい、また別のある人たちは弓矢をつくるのに非常に優れている。分業という点で最初のころ強い権力をもったのは神官だったらしい。神の名において一番すぐれた者が、例えば豊作にするには何をしなければならぬかを予言したり、人々の地位を決めたり、集団で移住すべき地を定めたりしたことでしょう。こうして、神官を頂点とした人々の階層化が次第に進んでいったわけでしょう。

**山登** ヒト系統が生まれたころは、50 人規模で土地は広いから幾らでも移動ができて、50 人規模で住むことができた。それが先ほどから話に出てくる何百人や 1000 人規模になってきた原因、というか由来はどうしてなのですか。

**増保** それは 1 万年前に農耕ができるようになってきたからではないですか。穀類だったら、多くの人々を養うことができますし、保存もできますから。加えて、次第に定住がしっかり根づいていったのでしょう（表 1）。

表 1. 世界の人口推移（環境省のデータから）

出来事	人口
6 万年前 出アフリカ*	100 人未満
1 万年前	400 万人
5000 年前 農耕の普及	3000 万人～1 億人
2000 年前 ローマ帝国最盛期	2～4 億人
17 世紀	約 5 億人
19 世紀	11～14 億人
1950 年	25 億人
2000 年	61 億人
2010 年	69 億人
2050 年	(92 億人)

\*40 万年前アフリカで生まれたホモ・サピエンスが、アフリカを旅立ち、中近東に進出、その後世界中に広がっていった。その最初の旅立ちが約 5-6 万年前で、それをアフリカとした。（「第 1 章 食欲」の図 3 も参照。）

**山登** 数万年前までは 50 人規模で地球上をあちこち移動しながら生活を営んでいた。だけど何らかの形で大発明として農耕を発達させていった。農耕を発明すれば当然定住せざるを得ないのだけれど、そのおかげで生産量がふえ、人口を増やすことができた。人口がふえて、富の蓄積ができるようになってきた。だからこそ 1000 人規模でも平気になってきた。そうすると逆に狩猟採集当時の 50 人規模の協調性というのはある程度弱まる、必要性が弱まりますよね。そういうような多人数、敢えて言うと不特定多数の他人集団の中で分業も始まってきたら、どういうふうにも道徳というのか、統制というのか、とるのでしょう。それが先ほどおっしゃった宗教と神官だったのでしょうか。

**増保** 宗教が、あの男は皆を欺いていると告げたら、それは絶対的に正しいものとして受け入れられてしまう。神官は宗教の名のもとで働いている人たちですから、何千年も前から神官が大きな権力を握っていたことでしょう。神官は富も蓄え、奴隷を買うこともできたでしょう。ピラミッドが作られた時代のエジプトには、奴隷が多数いたようですね。

**山登** そうですよ。そうすると今から考えてみれば同じヒトという種なのに、その当

時には、ヒトの間にそれこそ大きな階層の差ができてしまっている。奴隷、士民（市民）、神官から統率者、権力者などですね。

**増保** それはもう宗教が起こってからでしょうから、1万年前には階層があったはずで  
す。

**山登** すると、そのときにはもう権力欲、金銭欲というのが明らかに出てきているので  
しょうか。それは50人規模の協調性の必然性が弱まったために出てきてしまったのでしょ  
うね。今の時代も同じですね。

**増保** 日本人同士、同胞だという意識がどこまであるかという、それはかなり希薄で  
すね。明らかな外敵もない平和な時代ですし。

### <金銭欲、権力欲、名誉欲などにまつわるネガティブなイメージの由来>

**山登** 協調性の必然性が減ったから、協調しなければというような自分の心の中の意識  
が減っているのでしょうか。本性としては協力欲を持っているはずなのに、何故それにと  
って代わって金銭欲だとか権力欲だとか、名誉欲だとか、そういう欲が出てくるのですか。

**増保** それは自分の胸に手を当ててもわかりますね。例えば、家族を養っていくために  
は、やりたくない仕事でも我慢してこなしていくわけです。しかし、もし突然宝くじが当  
たって2億円入ったら、それで家族を養えますから、もう自分の好きな仕事以外は何もや  
らないでしょう。権力欲、あるいは金銭欲、それは自分の一生あるいは家族の安泰にかか  
わっていますから、誰もが内に秘めているのではないのでしょうか。（1）自分が食っていけ  
る、（2）自分が食われない、（3）自分の子孫を残す、この三つの生物学的な本能を満た  
すことのできる条件が、この権力あるいは金銭で十分に賄われるということでしょう。

**山登** だけど権力だとか金銭だとかという言葉自体に、今でもやはり浅ましいという感  
じは何か残りますよね。どこからそれが由来するのですか。私がさっき言ったように、50  
人規模でサバンナで生き残らざるを得なかったというのが700万年前に始まり、少なくと  
もホモ・サピエンスが生まれた40万年前には協力しない限り生き残れなかった。だから、  
協力することが喜びとしてヒトに備わって、今でもそれが協力欲として残っているのだと  
思います。協力することがフェアな感覚であり、協力しないことはアンフェアだと。

**増保** 今の時代、協力する喜びをどういう局面で感じるか。私の場合、家族という集団  
では実感できます。私が支えなかったら家族の生活が成り立たないとか、子どもたちも自  
分が留年したら親は経済的に大変だろうとか、やはり家族の中ではそういう協力関係が培  
われています。しかし家族を超えて、さらにもう一つ大きな枠組みがあるか。それは、今  
日、すごく希薄ですね。

今思いつきましたので、ここでこれまでの議論を見通しのいい形にまとめてみます。こ  
の対談では、ヒトの協調性を中心軸にして議論してきました。ヒトは皆に協力したい、協  
力したと認められると嬉しい、という協力欲を持ちます。50人規模集団では、認められ  
ると「あの人はいい人だ」という直接的な評価を得ます。すると嬉しい。嬉しいからまた協  
力したいと思う。ところが、定住農耕（約一万年）以降、1000人など不特定多数の集団  
になり、情報が行き渡らなくなります。すると直接的な評価の代替尺度が必要になります。  
それがきつと権力、金銭、名誉なのでしょう。協力したと皆が認めると、褒美として提供

したのでしょうか。つまりそれらを得ることが、社会から認められたことを示すのです。だからそれらを得ると嬉しい、と思うのではないのでしょうか。さて、無制限環境下では“気がいい”戦略が優勢ですから、皆が協力的で信頼できるので、多分大抵は権力・金・名誉などに執着しなかったでしょう。だって皆が「いい人」だと評価されるのですから。ところが制限環境下の場合“利己的”戦略が幅を利かせます。それでも、昔のように帰属集団が必須で明確だった時代では、協力の程度が皆に明らかだったのではないのでしょうか。例えば、ローマ時代「ガリア戦記」を書いたカエサルや戦国日本で天下布武を唱えた織田信長や2章性欲で出たチンギス・ハンなど、かれらの帰属集団にとっては英雄的なリーダーだったのです。皆が認め、権力も金も名誉も獲得できたでしょうし、皆もそれを容認したと想像できます。また、国民もその帰属集団が明確で、統率者の下に貢献できたと思えたでしょうし、協力欲も満たして幸せだったのでしょうか。ところが今や人類皆ヒトという同じ仲間という認識、生産性も向上して一人でも生きていける時代になり、帰属集団の必然性が弱まり、曖昧となっています。逆に自由競争社会のため、ある意味皆が敵です。でも、人々は皆に認められたいという協力欲を持っています。そこでお互いの信頼関係も無い中では、評価を示す尺度であった権力・金・名誉を獲得して、皆に認められたことになったと確認したいのではないのでしょうか。つまり、権力・金・名誉の追求が、自己目的化してしまったと見受けられます。特に、この自由競争の“利己的”戦略優勢な時代では、その自己目的化した権力・金・名誉を、利己的に、アンフェアに、周りに害を及ぼしても得ようとする行動が目立つのではないのでしょうか。するとそんなアンフェアなやり方なのに、「あの人はいい人だ」という評価を得たことになっていることに対し、皆は認めることもできず、逆に妬みなどのネガティブな気持ちを募らせるのだと思います。(8章人々の不満と不安の図3参照)

**山登** なるほど、そうですね。すると今の時代では、ほとんど英雄などあり得ないことになりますね。そして皆が認める英雄がいるとしたら、せいぜい9章で述べる宇宙開発に成功し、SF映画などでよく出る宇宙戦争などが始まったときに、地球を守る守備隊長などがそれに当たるのかもしれませんがね。

**増保** もちろん今の時代でも、英雄という程ではなくとも、それぞれ個別には真に素晴らしい評価（皆に協力した、社会に貢献した）に値する人たちは沢山いますよ。権力の方は判定が難しいですが、金持ちでは例えばエジソンやロックフェラー、最近ではマッキントッシュのスティーブ・ジョブズ、そして日本では松下幸之助など、自身の努力と工夫により、会社組織で皆の役に立つものを作り、金儲けしました。金持ちであっても、きっと多くの人たちは妥当でその地位に値すると認めていると思います。ただ、程度については極端過ぎるとして、妬む向きもあるかもしれませんが。また名誉という意味では、自然科学の世界に沢山いらっしゃる。例えばニュートンやアインシュタインを立派だと賞賛するのに反対される方はほとんどいないでしょう。政治の世界でも、例えばナチスに迫害されたユダヤ人に救いの手を差し伸べた杉原千畝などは典型例でしょうし、社会では、3章協力欲の中で述べた新大久保駅での韓国人とカメラマンの行動など本当に多くありますし。そして芸術の世界では、音楽のベートーベンやモーツァルト、絵画のルノアールやピカソなどを代表として枚挙にいとまがない。さらに、この対談が属する分野である思想・哲学・社会人文科学でも、沢山の方々を挙げることができます。

**山登** 納得します。でも最近は何れも制限環境下の利己的戦略がますます優勢です。反対の例、つまり妬みを買う人たちが大勢いるように思います。権力についてもいろんな現政治家を思い浮かべればいいのではないのでしょうか。そして金持ち連中、特に大企業の経営者達にはひどいのが目白押しのように思います。福島原発の東電、脱線事故の JR 北海道、企業破綻で世界が狼狽えたエンロンやリーマン（ショック）、日本でも一時期騒がれたファンドマネージャーなどは、社会に貢献どころか害悪を垂れ流していながら高給を得ています。世間の妬みのターゲットでしょう。そんな不公平、アンフェアが許されてしまっているのが現代です。自然科学の世界でも、最近は何れも競争が熾烈です。1953 年 DNA の二重らせん構造モデルの提案で分子生物学のスタートになったとされるワトソン・クリックの論文では、胡散臭い経過があったようです。ワトソンはひょっとして心に疚しさを感じたがために、その贖罪の意味を込めて『二重らせん』という本を書いたのかもしれないよ。

**増保** そうですね。最近の政治、社会、科学どの分野においても、制限環境下という状況が色濃く影を落とし、ひどく利己的でアンフェアなことが起こっているようです。それは、協力したことの代替尺度であったはずの権力・金・名誉が一人歩きして自己目的化したお陰で、逆説的ですが、利己的に他人を蹴落としてもそうした協力したことの評価を分捕ろうとするのが当然のようになってしまっているからでしょう。

**山登** すると、この制限環境下の自由競争社会では、実は皆に貢献した、いい人だという評価にあたる権力・金・名誉を得るために、競争し、周りの皆をだましたり、蹴落としたりしているのですから、滑稽きわまりないですね。そうだとするならば、現代の人々って、まるでそんな滑稽劇のピエロですよ。

本来フェア感覚は、ヒトとして持って生まれた感覚だと思います。それなのに現代、フェアに協力すべき対象である 50 人規模の帰属集団の存在の必然性は無くなり、曖昧になり、逆に厳しい競争社会の中、競争相手は不特定多数の 70 億人にもなっています。そういう意味ではフェア感覚、協力欲を持ちながら、一方では権力だ、名誉だ、というふうな差別化を促され、評価される風潮です。

**増保** 自分がそのような権力欲や金銭欲の利己的な行為を受ける立場で考えると、アンフェアと思ってしまうのでしょうか。しかし上に立った社長さんが社員をしっかりと働かせようと考えたら、やはり社長表彰とかを設けて、社員間に序列をつくり、あるいはボーナスの査定を変えて、社員のモチベーションを与えるということはやりますね。ここの組織でもそうですし、なぜこんなもので差をつけるのだらうかと呆れてしまうこともあります。それは上に立つ者、組織を支えようとする者のやり方としてどうしても出てきますね。

このように権力、金銭、名誉などは、実は結局差別化に繋がります。それはお互いに差をつけて競争させることを目的としています。でも協力欲は、基本的に帰属集団に貢献したいという感情であり、競争するのは対抗集団に対してのはずです。

**山登** そうですね。この制限環境下の利己的戦略が幅を利かず状況では人を裏切ってでも競争しなければならず、すると単に世間の評価を獲得するための行為と映るために、後ろめたい行為と受け取られるのでしょうか。つまり、現代における競争原理は、協力欲とは反対のものであり、それ故後ろめたさが伴うのだと思います。心のフェア感覚に反しているという後ろめたさ、不正義感が人々の心を重くするのだと思います。それが、権力、金銭、名誉など、差別化に繋がる言葉に伴う云々に云われぬネガティブな（アンフェアな）

印象の原因なのでしょうね。

### <将来像>

**山登** そうした差別化を目指した欲望は、ヒトとして進化上生まれた本性としての協力の喜び、私、最終的に一番気にしているのは「幸せ」なのですが、それと反するところが出てきているように思えるのですよ。だから現代の名誉欲、権力欲などが生まれる原因なりを変えられないかと願います。ヒト本来の持って生まれた本性に従った喜びをそのまま生かせるような生活を70億人ができるようになるのが理想でしょう。

**増保** 今までの人類の歴史を見ると、避けがたかった問題だと思えますが、権力とか金銭というような形にしないで、貢献を評価する仕方をもう一度作り直さなければならないのかと思います。そして、もっと根本的には、今の自由競争の社会システムを別のものに変えるしかないのではないのでしょうか。

大きな集団になってきたとき、権力は宗教と一体になっていました。ある人が書いていたのですが、「宇宙人が地球の上のほうから見たとき、大きな建物があちこちに見える。何だろうと思ったら、それらはほとんどが宗教団体の建物だった」なんてことが書かれていました。宗教は重要な権威づけだと思います。仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教などがありますが、このように分かれていたらいつも対立の種ですよ。宗教は英語で religion です。religion というのはラテン語の「レリゲイル religāre (再び結ぶ)」という言葉から来ているのだそうです。同じ宗教内ではその意味が分かりますが、異なる宗教間では結びつけるのがむずかしいですね。宗教で結びつけるのではなくて、何か他のもっと根本的な、世界中の誰もが共有できるものがないのでしょうか。その意味で、「第10章 学問の融合」で触れますが、社会生物学が必要なのもかもしれません。

そんな意味合いから、それはホモ・サピエンスの進化とか、あるいは動物の行動とかを知ったうえで、今我々が100年ぐらいでは変えようのない自分たちの生まれ持った素性というか、生得のものを生かした方向を見つめる。そうすれば宗教にも関係なく、人種にも関係なく、国にも関係なく一緒に分かち合える共感が生まれるようになると思います。そういう自然科学に基づく人文科学、あるいは思想を一つの方向として打ち立てていくことが、権力欲や金銭欲などに太刀打ちできる一つの方向ではないかと思えます。

**山登** それに関してはまったく大賛成です。つまり今の宗教はキリスト教、イスラム教などそれぞれが反目しているという形で、限られた人たちだけが信じるような狭い範囲の宗教になってしまっている。だから現代のこのような宗教は、それぞれ考え直してもらい、もっと広くすべての人たちを包み込むようなものに統一すべきだと私は思います。それに対して、おっしゃるように何らかの形で、それこそこの本も含めてですけど、生物としてのヒトを土台にしたような——私たまに言いますよね、核酸仲間、核酸教と言いたいのですが——そういう知識をもとにしたような一種の宗教、または宗教とは言わないほうが良くて、科学的な知識を普及させるべきですね。皆さんが共有できる知識をもとにしてルールをつくっていく、それが将来の基本だと思います。

**増保** 10年あるいは100年では決して変わらない、そしてどんな人種だって同じに見える、言葉が違っていてもそれは共有できる、そういった原理あるいは概念がやはり普遍的



な一つの我々の基礎になるでしょう。それがこの対談の一つの大きなテーマですよ。

**山登** 全くその通りです。皆さんに対して、私たちが依って立つべき科学的な意味での土台・基盤を提示できればいいなど。それをもとにして本当に皆さんが幸せになれるような将来像を描くことができれば一番いいのですが、ちょっと大層な仕事にはなりそうですが、少なくとも考えるヒントは提示したい。

**増保** では、将来像としてまとめてみます。個人については、この対談の食欲や性欲のところでもお話したように、現代では協力欲および本来はそれに従属しているはずの権力・金銭・名誉への欲望についても理性的にしっかりコントロールすることが必要なのでしょう。それが“フェア”や“モラル”意識に繋がり、現代の世の中でも協調の輪を維持するための源泉になるのですよ。また社会組織体制としては、やはり制限環境下では、自由競争のいくらかの制限が可能であるような体制（提案したのは自給自足圏）が望ましいと思われま。

### <宗教について>

**山登** 現代社会の一つ大きな問題が、宗教の問題だと思います。9.11、イスラム原理主義者たちがアメリカのニューヨーク世界貿易センタービルに飛行機を突っ込ませるといったようなテロを起こしました。それに対してブッシュは、フセインが悪いとイラクに戦争を吹っかけてしまいました。これって昔の十字軍にそっくりです。ヒトの歴史の中で、いつごろから宗教って生まれたのでしょうか。

**増保** 宗教は化石のような形では残りにくいから、描かれた壁画から宗教があったのではないかと推測したり、埋葬された遺体のわきに花など副葬品が置いてあったことから推察したりしていますね。そんな具合ですから、いつ宗教が生まれたというのはなかなか答えにくいでしょう。宗教は抽象的ですから、どうしても言語あるいは文字が必要だと思います。そう考えると、1万年前から5000年前ぐらいに比較的是っきりした宗教が出てきたのではないのでしょうか。キリスト教もイスラム教も約2000年前に砂漠に近い環境の中で生まれた宗教ですね。部族間の闘争が激しかった。そんな背景があって、統一するためには何かルールづくりが必要だった。そうすると、宗教はどうしても排他的で、自分たちが結束するための重要なルールだったのではないのでしょうか。

**山登** 自分たちの集団をまとめたり、その集団を他の集団に対して戦闘・対抗させるために、相手を敵とみなして、自分たちの結束を高め、高揚感を与えたり、そういうものとして宗教が生まれたのですね。

**増保** それに比べて、インドで生まれた仏教は、それほど排他的じゃないし、日本の中の一部の宗派はきついルールがあるとは思いますが、まあ温和ですよ。

**山登** それこそ仏教では、どうして人は苦しむのか、どうして死ぬのか、死から逃れるすべはないのかと問いますね。ある意味、哲学みたいですよ。

**増保** 共通していることは、宗教では、生き物が逃れられない死というものに対して、それを救う神がいて、あの世には極楽があると人々を導く。そんな神の権威を与えられているのが神官や首長だということですね。果たしてそういう宗教が今、世界の人口の何割かに信じられているのですが、今日の社会あるいは人々にどんな意義を持っているのでし

ようか。良いことばかりでもないでしょう。

でも人間って、ほかの動物と同じように死んでいくのですよ、誰もがね。その死に対して、「極楽があるんだ、神があなたを導いてくれる。だから正しく生きていきなさい」と説く。これはすごく説得力がありますね。

**山登** だけど普通に教育をしっかりと受けた人たちは、いまさら神だ、天国だ、なんていうことは信じていないと思うのですけど。

**増保** 本当ですか。私は、宗教や神の存在を信じていたほうが心の平穏を保つためにはいいだろうと思います。でも、それに代わる何かほかの心の拠り所があればいいのかもしれない。

**山登** 宗教、神を信じている人は、今の世の中で不安はないのだと思います。しかしかなり多くの人たちが、結局神もない、天国もないということを悟りつつあるし、教育も受けているから、不安になっているのですよ。その意味でも先ほどのまとめで対談したように、次の時代を導けるような基本的な原理が必要なのですよ。

**増保** 宗教と次の新しいコンセプトとは何が違うか。それは神の存在を立てない。それから死後の世界というものを前提としないということでしょうか。

**山登** 全くそのとおり。私もその意味では、次の時代を導けるような、宗教に相当するようなものというのは、こんなことを言っていていいかどうかわかりませんが、生命科学者としては核酸教だと思っているのです。地球ができたころ、宇宙から核酸の素である塩基やタンパク質を作る材料であるアミノ酸などが降ってきた。それが重合して自己増殖できるようになった。それが膜をかぶって、細胞ができ、細胞が集合した生物ができ、その末裔として私たちがいるのです。当然、増保さんも同じように生物化学を学びましたよね。そのおかげで私、本当に仏陀の言う輪廻というのが、ああ、そうなんだ、仏陀って正しいことを見ていたんだと思えるようになったのです。私たちは、栄養物の摂取、代謝、排泄をし、それが今度は植物の肥料となって、次にはまたその植物を私たちが食ってというように、私たちの体の成分である炭素、水素、酸素などの元素は、めぐりめぐっています。輪廻しているのですよ。

**増保** それは食物連鎖であり、宗教で言うところの「輪廻」は人間が死んで、馬に生まれ変わり、馬が死んで、柿の木になり・・・というようなことでしょうか？私個人は山登さんとは違う考えを持っています。あまり多くは語りませんが、生物学とか進化論とか、動物行動学から見た生物としての自分、物質科学で説明できる自分というのが一方にあります。これですべてが説明できるかというところとできないのではないかと。その捉えきれないところを悠久の時間や果てのない距離、そういう言い表せない何かを置いてしか捉えられない自分。物質科学だけで説明しようとするのは不遜だという気がするんです。

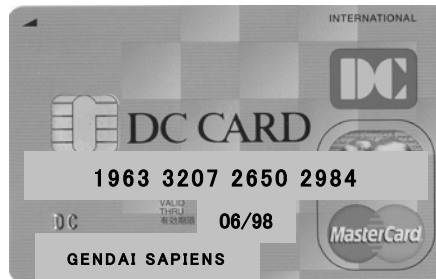
**山登** そうですか。だけど、生物学を学んだ後で考えてみれば、現存の宗教が与えている答ってすごく安直だと糾弾したくなるぐらいなのですが。地獄だ、天国だなんて絶対にありっこないと信じています。

**増保** 宗教や神の存在と物質科学のあいだには、決定的なギャップがあります。でも、そんなものは存在し得ないと断言してしまうのは、何か不遜な気がします。すべてが自分の知る科学というか、これから明らかになってくる部分もあるかもしれないけれども、そういう生物学ですべてを説明できるかというところ、それはまだ答えられない。

宗教に関しては、私たち二人、同じ生命科学研究者でも異なる意見ですね。宗教については、多分今のところ人それぞれの思いを許容するのが妥当なのじゃないでしょうか。今後の科学の発展によって、また時代の変遷によって、その宗教自体も変わっていくでしょうし。

## 第6章 貨幣の功罪——マネーに翻弄される経済

クレジット・カード



左、紀元前 490 年頃、ギリシャのアテネで用いられていた 4 ドラクマ銀貨。女神アテネを象る。  
右、現代の信用（紙幣など）の代表、クレジットカード。

## <現代のマネーの問題>

**山登** 現代社会は、マネー社会、金融資本主義などと取りざたされ、非難されています。この貨幣経済というのか資本主義社会というのが、どんなふう生まれ、どこが問題で、どのように改善したら一番よさそうか、議論できればと思います。生命科学者として経済なんてあんまり知らない人間が、ない知識とない知恵を絞りながら議論することになるのですが。

今の貨幣経済、特にマネーと言われている金融資本主義がいつの時代に始まり、何が問題なのかです。新聞、ニュースで大きな問題になっているギリシャの金融危機、不良債権や、アルゼンチン（ペソ）のデフォルト危機などは、経済の弱いところに、世界中のマネー、よく言われるデリバティブなどを使って自分の持っている原資の何百倍という国の経済規模レベルの金を国際的に動かしてバブルにし、次に一挙に引き揚げてバブルをはじけさせ、国レベルの経済破綻を起こさせるような状況に至っています。しかも、それらの資金から必ず何%かの利子というお金儲けができてしまいます。端的に言えば、金が金を生む社会が現代の金融資本主義です。今もユーロが駄目、アメリカのドルも弱い、この元凶は、貨幣経済、特に金融資本主義のコントロールが効かないことが問題なのでしょう（図1）。そのおかげで、世界の若者たちが失業に苦しみ、アフリカなど発展途上の国々とその国民が厳しい状況に至っています。現代の問題というのは、この金が金を生む制度にあり、それをコントロールできないことなのでしょう。こういう貨幣に基づいた経済、どこから始まりどこに行こうとするのか、どうしたらヒトの幸せにつながるのか。その辺をお話ししてみたいと思います。いつの時代に、この貨幣って最初に生まれてきたのでしょうか。

## <貨幣の起源とその性質>



図1. 世界大恐慌(1929年に始まる大不況)により家を失い、流浪の身となった子供達の写真。大恐慌後ケインズの修正資本主義が出た。(ウィキペディアより。ドロシア・ラング作)

**増保** 狩猟採集のころは物々交換でした。私の村では魚が釣れる、向こうの村ではマンモスが獲れる、お互いに交換しましょうという形ですね。でも、物々交換では持ち運びも大変だし、魚とマンモスでどんな比率で取りかえたらいいのかもはっきりわからないなど、いろいろな不都合があったでしょう。結局、ギリシャ時代に銀貨が発明されて、魚はこれだけの銀貨でやりとりしようとして取り決めれば、銀貨はどこにでも持っていける。銀貨で売買が成立する。それが強大なローマ帝国の時代になると、貨幣が銀貨という純銀ではなくて薄めた銀を使うようになりました。それでも、ローマ帝国という強大な権力が背景にありますから、その信用でもって、貨幣そのものはそんなに高価でなくても、たくさんの物資を流通させることができるようになっていったわ

けです。

さらに、それが信用という形で、今では紙幣が広く使われるようになり、膨大な量の紙幣が世界中で用いられるようになりました。紙幣さえももう使わなくなると、クレジットカードで支払ったり、あるいは企業の株式で資産を運用する人たちもいます。こうなると、本来何も物を持っていない人たちが、あるいは何の信用もない人たちが、形の上だけで、金が金を生む、あるいは金のやりとりだけで物事が進む。その結果、本当に物が作られているのか、あるいは作られていないのか、それが見えなくなってしまう。ここが問題だと思いますね。

**山登** 物々交換の前は当然、自給自足でしたよね。だから、50人規模だと自給自足だけで済んでいた。それがある程度、地球上に人々の村がたくさんになってきて隣村ができると、村の間で分業ができる。それが定住の始まりですかね。

その作物を交換しているような時代というのは、物だから、例えば麦だとか米だとかなら腐ってしまう（このことを原価償却と呼んでいる：一般の生産物などは、時間をおくと、腐ったり錆びたり消耗したりしてその価値が目減りし、最初の値段と同じ値段では売ることが出来ない。その目減りのことを原価償却と呼ぶ）。ところが、非常に便利なことに、ギリシャ時代に銀貨という貨幣が発明された。なぜギリシャで、こういう特別な貴金属を交換の共通の資源に使うようになったのでしょうか。

**増保** どういう経緯で銀貨が生まれたかは私も知りませんが、ギリシャには大きな銀鉱があったそうです。鉱石から純銀を精錬する技術も開発することができた。ギリシャの遺跡を見ると周りがはげ山でしょう。あの時代に木を切り倒したため、いまだに木が育たないのだそうです。

**山登** 銀って、きらきら輝くから、きれいだから貨幣に使おうと思ったのでしょうか。

**増保** 希少価値があるし、それから鑄造しやすいのじゃないですか。また、当時としては錆びない（原価償却しない）ということが特徴としてあったからではないですか。錆びない（腐らない）だけでなく、軽いから、銀貨を持って隣村まで片道5時間かかって行くなんていうこともできたでしょう。そういう便利さも大きい。錆びる場合には、日が経つにつれて買った値段からは価値が減り、売る場合の価格も値引きせざるを得ません。

**山登** 確かに貨幣って便利は便利ですね。ただ、気になるのは、どうして腐らないからいいのか、腐らないから貨幣に使ったのだとしたら、将来も貨幣というのは腐らないもの（原価償却しないもの）を貨幣にせざるを得ないのでしょうか。貴金属って要するに腐らないですから。もし腐らないという特徴があるからこそ貨幣なのだとなれば、貨幣に原価償却なんていうシステムを導入するのは無理なのかもしれない。そうなると、これまでと同じように、貨幣は物品よりもどうしても有利になり続けますね。

なぜ、ギリシャ時代に銀貨が貨幣として定着するようになったのか。誰か解明した人はいるのですか。

**増保** 歴史的な経緯は知りませんが、容易に想像がつきますね。持ち運びも簡単ですし、物の価値を決めるときにも、このトマトは銀貨3個、この魚は銀貨3個という具合に決めてあれば、どこでも銀貨で交換ができるという意味で、容易にお互いの物品を交換できます。便利ですよ。

**山登** その意味ではとても便利です。だけど、逆にそういう便利さも確かに時間に対し

て価値が変化しない（減価しない）という性質のおかげで生まれているわけです。今日ここでトマトを幾らで売買する。明日か一週間後に別の商店に行って本あるいはハンカチを買うときに、貨幣の価値が変化していれば、すごく不便ですね。そうしたら貨幣が時間に対して価値が変化するというようなシステム（貨幣の原価償却＝減価）は、全く無理でしょうか。

**増保** そんなことはないでしょう。確かに、紙幣とかあるいはコインで持っている、その価値を変えるのは難しいですよ。例えばコインとすれば、今日手に入れたコインを一週間後には原価償却としてコインの一部を切り取って、公的機関に預けないといかんとか、そんなことになったら、とてもじゃないけどやれない。だから、お金の原価償却をやりたいのであれば、クレジットカードでお金の出し入れをして、一週間経つごとにクレジットカードにある金額が 0.1%ずつ減らされていくというような、自動的にそういう仕組みをコンピューター上でやっておけば、それはできないことはない。

**山登** ギリシャ時代だったら、便利なものとして持ち運びもできるし、何にでも対応ができるという意味で、銀貨とか金貨という貴金属が利用された。それに伴って、持って生まれた性質として、価値は変化できなかった、させづらかった。銀貨を削っていくなんていうことはできなかった。

**増保** ギリシャの時代は本当に純銀でそのままずっとやっていったわけでしょう。ローマの時代になって皇帝が、おれの名のもとにこれを使うんだというわけで、純度の低い銀貨であっても、それが信用させられたという形で変化していったわけですね。

**山登** では、ちょっと希望が出てきた。じゃあ銀貨、金貨なんて使っているときは貨幣の価値を時間に応じて変化させるなんていうのはほとんど無理、実質的には無理ですね。だけど今のようにクレジットカードで売買すれば、IT で自動的に減価できないことはない。

**増保** ゲゼル（後述参照）が言っている時代には、コンピューターがほとんど普及していなかったから、それは難しかったかもしれないけども、今だったらできる話ですね。

## <資本主義の由来、自由・平等・博愛の宣言と自由競争の市民社会＝人間中心主義>

**山登** よし、すばらしい。で、その貨幣はもともとギリシャ時代、都市が生まれた時代から存在していた。しかし、資本主義になったのははるかずっと後ですね。資本主義という時代は自由競争というふうにとらえ直すこともできると思いますが。

**増保** この貨幣経済の中で問題なのは、お金を持っている人がお金をお金で得ている。お金がお金を生むという形で、結局お金を持っていない労働者を支配しているということが、やはり問題でしょう。それが我慢できる範囲内であるうちはよかったけれど、もう世界中、我慢が切れるところまで行きかねない。

**山登** それこそこの資本主義社会で、やっとなんか万民が一応市民という形になったお陰で競争が激しくなったのだと思います。昔の奴隷制社会や封建制社会の頃の人類では、階層がはっきりしていた。日本だと江戸時代には士農工商という形で制度として定められてしまっていた。すると、人々の階層間の反目というのがかかなり抑えられていた。何故なら、階層という枠があって、その枠にある程度従順に従って生きていた。それで経済が成り立つ

ていた。江戸時代、ある本によれば皆さん幸せだった。<sup>おのれ</sup>己の分に応じて生活をしていたという意味で、自分の分相応な中で生きている幸せを味わっていたというふうな記述もあります。

だけど、資本主義社会のはじめ、市民社会になり、万民が平等だというような思想がヨーロッパで生まれたとき、当然、階層が違うということ自体が非常な不満になり、反乱が起こったのでしょう。革命まで起こりました。資本主義社会が生まれ、ついに万民が原理的には平等になり、市民社会になったのです。それはすばらしいことなのですが、万民が資本主義社会で平等であり、自由競争するという話になってきて、競争が非常に激しくなってきたんじゃないか。競争から生まれる不平等な社会が問題点なのです。

**増保** そういう歴史的な背景から貨幣経済に基づく自由競争が激しくなってきたのですね。

**山登** 以前、制限条件下の「囚人のジレンマ」では利己的戦略になってくるということをお話ししました。生命科学や進化を勉強して、こうした原理を理解すると、経済状況も人間の活動も同様の原理で説明でき、資本主義や貨幣経済での競争など社会科学の現象一般を理解する上でも役に立つように思います。そこで、そういう原理からこの金融資本主義社会をとらえ直したとしたら、将来、どんな対策を打てば改善ができるかって見えてくるのではないかと願ってお話しています。典型的な例が大航海時代の経済活動や国の体制の話です（この本の最後の参考としての注を参照）。要約します。中世ヨーロッパ封建社会での人口増加、階層の固定化といった閉塞状況からの脱却を目指してルネッサンスが起こり、ついに新大陸の発見により、大航海時代が幕開けしました。一時的には旧大陸人にとって資源の無制限環境下への拡大をもたらし、旧大陸人の皆が経済成長を享受できる環境に変化したと考えられます。旧大陸人は富の分配を行い、無制限環境下の“気がいい戦略”（「第3章 協力欲」図1を参照）を経済活動においても実行できる状況に至りました。当然、新大陸、アジア、アフリカの人々は悲惨で不幸な生活を余儀なくされていたのですが。しかし、とにかく旧大陸内での“気がいい戦略”原理の普及に伴い、自分たちの中だけではいわゆる人間中心主義の宣言であるフランス革命（1789年；市民革命）の自由・平等・博愛の宣言となったのです（図2）。それは輝かしい画期的な出来事でした。何故なら、生物の生存原理自体、利己的な遺伝子そのままの増殖圧に従い、基本的には無制限環境下での自由な増殖と自然淘汰で生存し増殖し進化し多様化してきたので



図2. 大航海時代後のフランス革命で、市民は自由／平等／博愛の人間中心宣言をした。左、1830年ドラクロアにより描かれたフランス革命の絵『民衆を導く自由の女神』。右、フランス国旗。



あり、ヒトについても奴隷制や封建制の桎梏から解放されるべく、人間は皆生物の一種であり自由・平等であることを再認識して、それを宣言したのですから。この原理に従って、経済活動においても、自由競争主義、資本主義が普及していきました。その端的な表現が、アダム・スミスの“見えざる手”に導かれる経済でしょう。無制限環境下では、つまりは自由を尊ぶ原理と言えるのです。しかし、実は歴史の大半が制限環境下の競争であり、利己的戦略が幅を利かしたはずです。昔、エジプトやギリシャ・ローマ時代は奴隷制時代でした。その後中世ヨーロッパでは農奴による封建制社会でした。その後ヨーロッパでは先に述べたように、ルネッサンス後の市民革命となったのです。そして今や地球全体規模で既に厳しい制限下の環境となっていると考えられます。

**増保** 大航海時代以降は、植民地時代で、国々が争った。低開発国と言われる地域の人々を本当に搾取したような時代でした。その間、重商主義により市民の台頭、続いてフランス革命があり、産業革命が波及して資本主義が本格化しました。次に、帝国主義時代、各国が資源をめぐる争い、戦争した時代です。この間、何回かの画期的な技術革新により一時的に経済上の無制限環境下に似た状況により経済発展しながら、上述のような段階を経て、地球の財産を奪い合い、削り過ぎてしまい、そのたび毎に経済活動が厳しい制限条件下になってしまったために、何回かにわたって利己的な振る舞いが目立つようになってしまったのです。

その最直近の話が、現在の金融資本主義時代なのです。IT革命のおかげで、情報関係が新しい分野として産業を牽引できた時代が最近までありました。そのおかげでお金の動かし方に関しても、非常に速やかに大規模に動かすことができるようになりました。ところが地球全体が、レアメタル問題、石油の枯渇、CO<sub>2</sub>問題という形で、完全に制限環境下になってしまっています。一方、IT革命のおかげでお金だけが自由な振る舞いをして、本当は分け前というか対価としてとるべき地球の恵みがほとんど枯渇している状況に対して、金だけをどんどんふやして行ってしまった。それが現代です。そんな現代のとらえ方をしたとき、今後この貨幣経済、資本主義経済をどういうふうにしたらいいかという方策のアイデアが出てこないかなと期待して、こんな見方をお話ししています。その言わんとするポイントは次のことです。無制限条件下で「自由」が叫ばれ、自由競争が進められた。しかし、今日は地球規模の制限条件下になってきた。はたして「自由競争」でいいのか？今日では、その「自由」に歯止めをかけるべきなのではないか？というものです。

### <貨幣の弊害、金融資本主義の明日を考える。自由貨幣の可能性>

**山登** “世界で通用する共通の通貨をつくる。”それは、もちろん今は無理だと思います。おまけにちょっと悲観的なのは、せつかくヨーロッパで、それぞれの国が古い共通の歴史を持ってきたから、ユーロというような形で経済共同体にしようとして、それが今や爆発寸前なのですから。これは、ある意味、悲観的で危機意識に繋がります。だけど人類としては、ユーロをつくったような形で、世界の通貨を統一する方向に行くようには思うし、行ってほしいと思います。

**増保** 通貨を世界で一つに共有化したら、労働者が搾取されることはなくなるのだろうか、金が金を生むということはなくなるのだろうか。

山登 いや、それはないですね。今の通貨というか経済制度で地球国みたいなのができたとしても、当然、金を持っている人と労働する人たちと質が違いますよね。そういう意味では、今の状況と変わらないでしょう。むしろ増保さんがさっき言われた減価する貨幣が大切です。

ここでちょっとゲゼルの紹介をします(図3)。マルクスと同時代の人です。共産主義とは異なり、自由競争を前提にして、かつ資本家に搾取されるような労働者といった存在を無くせないかと考えたのです。一つは自由地。地球上の土地は地球のものであり、個人に属する私有地などあり得ないという主張です。もっともだと思います。個人には賃貸するのは。誰がか?ちょっと複雑な問題ですが、基本的にはその土地の政府が、でしょう。また石油などの鉱物資源や水なども同じ部類に属するかも知れません。本来は地球皆のもの。水は今皆のもの認め、飲料水にするまでの手間賃を水道代として払っていると思います。自由地に近い取り扱いですね。さらに、もう一つは自由貨幣の考え方です。本章の初め辺りに貨幣の起源と特徴、利点を挙げました。貨幣、さらには現代の信用全般だけが、実はものと交換する際に原価償却しないという有利な点を持ちます。いつまで持っても価値が変わりません。一方他の売るために作った物は、作った時から原価償却していきます。昔は物々交換しました。腐ったり錆びたり、早く売らねば価値が下がります。実はそのことを勘定に入れて商売しました。でも貨幣は腐りません。有利です。だから、貨幣だけが銀行に預けていて金利がつきます。当今不労所得と言われるやつです。資本家ができるし、金持ちになりたいというので金銭欲も出ます。相続税があるけれど、でも金持ちは何代も続いた。そこで、貨幣も減価させるべきだというのが提案です。一般の“もの”と同じく、持っているだけでは目減りする制度にすれば、貨幣も物と対等になり、労働者と資本家は対等の立場になるだろうという考え方でしょう。ただ、経済学を知らない山登が疑問なのが、原価償却しない有利な点を特徴として生まれたのが貨幣なら、貨幣や信用を減価させる制度にすると、今度はその原価償却しない貨幣の原点であった貴金属(金銀や宝石)に貨幣がまた舞戻って行かないかということです。但し、現行貨幣や信用はいく

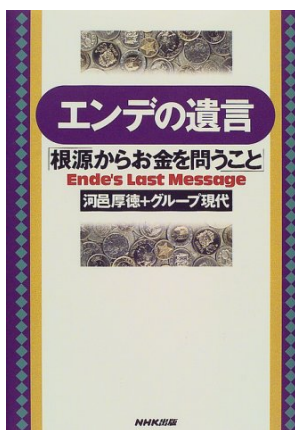


図3. NHK出版の『エンデの遺言』の表紙。ミヒャエル・エンデは、ゲゼルの「自由地と自由貨幣」の考え方を評価していた。自由貨幣を小村で実験中と記されている。

らでも発行できますが、元の貴金属に戻れば金本位制に近い形になり、経済規模は縮小するでしょうね。現地球経済規模ではやはり貨幣が必須かも知れませんが、元に戻ることはあり得ないかもしれませんが。

増保 減価される貨幣。『エンデの遺言』に載っているように、世界の小さな村の何か所かで試験的に運用されています。だから小さな村では運用してうまくいくかもしれないけれども、世界あるいは国の規模でも貨幣を特別な地位には置かないという経済制度ができれば、すごいですね。それともう一つ、私有地も同様の問題を含んでいるでしょう。私が住んでいるあたりで大きな家の多くは地主さんです。地主さん自身が果たしてどれほど汗水垂らしてその土地を獲得・維持してきたかはわかりませんが、多くの場合、親あるいは祖父母から受け継いだものでしょう。土地ももう少し公共性を重んじるべきではないでしょうか。

**山登** そうですよ。土地は地球のものであって個人のものじゃないですものね。

**増保** どう考えたって、今の日本の地主のありようを見ると、これは変わってくれないと、もう労働意欲も湧かなくなってしまう（笑）。

**山登** そうですね。だからゲゼルが自由地・自由貨幣という考え方を出したのです。彼が言いたいのは、皆さんが物を生産して、その物を何人かの人たちが使って喜んでくれるということに対して、生産した喜びを感じられるそういう世の中になってほしい、それを願って、貨幣だけが特別な地位でお金を持っていれば何でもできるという状況を変えたいということなのです。だから、土地に関しても自由地であって個人のものではない。貨幣に関しても持っているだけで、物を生産したその物と同じように価値が減っていく。そういう考え方を打ち出したのですが、それだけで本当に変わるかは、不安ですね。

**増保** 銀行とか証券会社のあり方というのが、重要な問題ですね。金が金を生むという意味で言うと、個人の問題もあるけれども、それを束ねているのは銀行とか証券会社でしょう。それこそ本当に減価するような貨幣にしたら、銀行とか証券会社って成り立ちますか？

**山登** 今は預けているほうも、お金を預ければ利子がつく。それが今度は利子なんてつかないで、預けるだけで、預けたというその業務を委託したという意味の手料を払わなきゃいけない、そういう話になってくるのですよ。

また、銀行も自己資本を8%は持っているはずなのだから、その分に関しては自分の金として毎年減っていくのです。恐ろしい話です。だから逆に、こんなシステムができたとしたら、銀行、証券会社って成り立つのかしら。私、本当にこのシステムができれば、デリバティブとかというのはあり得なくなるのじゃないかという気はするのですが。

この対談をしていて、気付いたことがあります。経済学の素人のナイーブな見方では、現在の貨幣経済のシステムは根本的に間違っているように見えます。作った物や地球資源は価値が減っていきます。ところがその対価として支払われたお金（流動性）は減りません。もっとひどいことに、最近では世界的にも、赤字国債など架空の流動性をでっち上げています。もちろん、技術革新や工夫により、より良いものを作り付加価値を高め、価値を創造していますので、経済の成長拡大も可能であり、また減価しないお金の価値と釣り合うのかもしれませんが、でも、例えばエネルギー収支を考えます。現在の地球上のエネルギーは基本的には過去と現在の太陽エネルギーに由来しています。今でもその数パーセントしか利用していないようです。それを技術革新で向上させて経済成長が可能かもしれませんが、それでも限度があります。現在は、赤字国債などで、将来の技術革新を当て込んで地球の屋台骨を削っているように見受けられます。ところで、理系学問では極限を取って単純化し、現象の本質を見極めることをよく行います。マクロ経済でその極限を想像してみると、恐ろしいことが起こりそうです。つまり、地球の骨までしゃぶりつくし、地球資源という元手も無くなり、物もほとんど作れなくなっても、お金だけは減らないのだから存続しています。そんな状況って、とんでもない超ハイパーインフレではないでしょうか。その間、金は金を生み、格差社会の拡大は必至でしょう。現在の経済システムの基本は、金余り状況を作るシステムなのです。そんな世の中に生きる人々って、とても不幸だと思います。どこかこの私の推論に間違いがあるのでしょうか。間違っていないとしたら、空恐ろしいことです。インフレターゲットなどと唱える経済学者の考えはどうなっているの

でしょう、本当に大丈夫なのでしょう。

平成 26 年末、読んで頂いた方からコメントと本の紹介をして頂きました。その本は柄谷行人著『トランスクリティーク』（岩波現代文庫）です。カントとマルクスを論じています。マルクスの『資本論』で、商業資本主義をG-W-G'で定式化し、資本の自己増殖圧を、複数の価値体系における差異（時間・空間）から説明し、資本主義下ではG-Wの部分の貨幣・信用の回収の先送りがあまりに大きくなる時、その売りと買いを統一するために恐慌が起こるとしています。すると、これまで論じてきた生命科学研究者の視点からは、囚人のジレンマ・ゲームで述べたように、この先送りが破綻するのは制限環境下であるからだと原因を特定できると思います。無制限環境下では、先送りした信用は、基本的にはいつでも回収可能であると期待でき、恐慌に至るはずがないと考えられます。ところが既に制限環境下にある地球上では、先送りされた信用を回収できるうちに回収しないと大損する羽目になります。だから皆がそんな利己的な思いに囚われたとき、恐慌になると解釈できます。そして、先の段落で述べたことから、貨幣・信用でG-WとW-G'を分離できるのは、理想状態としての無制限環境を仮定したときのみであると理解できます。そのことに対応して、奇しくも、資本主義の登場発展は、あの大航海時代の頃、旧大陸人からすると地球上の富が無制限と思えた時代でした。生命体の進化過程同様、自由競争によって自由・平等・博愛を皆が享受できると期待（錯覚）できたからこそ、常に技術革新で経済発展を必要とする（生産）資本主義が生まれたのでしょう。それは、核酸生命体の自己増殖圧と生存・進化の関係と同じです。生命体にしても、資本主義システムにしても、そのシステムが生き残る原理は、自己増殖圧（つまり縮小や自死のシステムを持たないこと）なのですから。ただ、生命体の進化は、環境への適応度競争によって起こるだけなのに、資本の増殖は、複数の価値体系＝環境の時間・空間的差異を利用して起こります。（もちろん生命体は、環境の変化により、制限環境下の利己的戦略の時代、絶滅の時代などを経験したはずですが。しかし空間・時間的な環境の差に翻弄されるとしても、それを利用して繁栄するという戦略は無かったはずですが。）そして、その資本の自己増殖分（剰余価値）は、実は労働者からの搾取に相当するとされるようです。もちろん貨幣の優位さに基づき、労働者が資本家により常に支配・コントロールされるという関係は妥当な分析であり、搾取と言ってもいいのかもしれませんが。ところが私たちには、そういった見方は一面的であるように思えます。むしろ労働者の搾取というよりは、実は地球本体を貪り食っている（地球を搾取している）と見えているのではないのでしょうか。資本主義下では、どの国も、どの政治・経済システムも、どんなに良心的に経営する企業体も、結局は平均利潤率という形で世界総資本の搾取体制に組み入れられています。さてすると、どういう経済、貨幣制度がいいのでしょうか。柄谷氏はゲゼルの提案する減価する貨幣より、リントンが提案するLETS（地域交換取引制度）を推奨しています。どんな制度がいいのか、今後研究する必要があります。また、表面的には、ケインズの修正資本主義により、国家、または将来の地球国が、世界総資本の剰余価値を再分配すれば、剰余価値が労働者＝消費者に還元され、搾取という部分は消え去るように見えるかも知れません。しかし、資本主義である限り、資本の持つ剰余価値獲得性行を無くすことはできないと思われまます。何故なら剰余価値を無くすなら、資本の運命は縮小しかあり得ませんから。『トランスクリティーク』では、

現代のような一国による修正資本主義（国家による再分配）は、資本＝国家＝ネーションの罠に引っかかり、結局世界総資本の剰余価値獲得に貢献するだけである、または国民国家としてのネーションの民族主義に翻弄されることになるとしています。でも、現地球上の中の一国によるのではなく、地球全体が一国になる場合でも、同様の資本による剰余価値の搾取は続かざるを得ないのではないのでしょうか。おまけに、剰余価値の再分配に成功して搾取など無い状況が生まれたとしても、G-W-G'で利用されるW（つまり材料と労働、または生産物であるサービスや商品W'）は最終的には原価償却により価値が零になります（例えば年金生活者に対する食堂でのグルメ提供を考えてみて下さい。メニューはその場限りで消費され、年金生活者による次の生産は無いのですから、即無に帰します）。上の段落で憂えたそのままの金余り状況です。そこでやはり減価する貨幣を考えたくになります。減価の割合を、その剰余価値（利潤率）に対応させることができるなら、搾取はなくなるのかもしれませんが。すると今度は技術革新するためのインセンティブが働かなくなりそうです。でもそんなことを心配するのは、私がこの資本主義体制に考え方まで浸食されてしまったからかもしれません。本来は、この本で明らかにしたように、競争によるインセンティブはアンフェアに繋がり、むしろ皆の役に立つから嬉しいという協力欲によるインセンティブが本当のものだと思います。まとめますと、まず地球国といった形での価値体系の統一、5章階層化で述べたように、「いい人」という評価の代替として生まれた権力・金銭・名誉欲を無くすための情報の普及（最近インターネットの普及で可能になりつつあります）、そして当然資本の自己増殖圧により必ず生じる経済成長圧力を消すために、労働により生産される（サービスも含む）価値の償却に見合う原価償却する貨幣、というシステムが導入されるべきだと予想します。それでこそ、制限環境下にある地球の富と釣り合いの取れた貨幣が保証され、恐慌も無くなり、皆のために生産するから嬉しいという日常を私たちの手に取り戻すことができるように思います。あとは9章で述べるように、またまた外部への拡張、無制限環境の到来を期待するしかないのでしょうか。この本をさらに発展させて、人文社会学者のご協力の下、具体的な将来の社会組織体制を提案できるようになることを祈ります。例えば、11章で述べるような環境の制限（CO<sub>2</sub>による気候変動問題など）が極限に達した時、人類は絶滅するのか、または大きな変革（革命）が起こるのかもしれませんが。柄谷氏は「アソシエーションのアソシエーション」を、私たちは自給自足圏の確立を提案していますが、どうも目指すところは同じような体制のような気がします。面白いですね。ただ、いずれにしても、動物としてのヒトの認識能力、50人規模、という境界条件は常につきまといます。それとどのように折り合いのついた社会組織体制があり得るのでしょうか。楽しみです。

### <将来像>

**山登** 貨幣は原価償却しない特別なものとして誕生した。その延長の“信用”が、現在金融資本主義の下、世界を席卷している。金融資本が労働者を牛耳るだけでなく、世界の景気や経済を左右し、失業問題も生んでいる。現地球資源の枯渇・制限状況を鑑みれば、無制限環境下では“気がいい戦略”として認められる自由競争も、貧富の差、階層を生むという意味でも、また金融資本主義の中のグローバル化を助長するという意味でも、いく

らか制限すべき時代なのかもしれない。その経済における一つの提案が、ゲゼルのいう自由地・自由貨幣かもしれない。また社会組織体制の面からは、自給自足圏の確立が必要なのかもしれない。これらのことは、結語において論じます。